

# 2018 年度 センター試験 数学 I A (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数： 2 題必答・2 題選択
難易度の変化（対昨年）	○ 難化    ○ やや難化    ● 変化なし    ○ やや易化    ○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加                      ● 変化なし                      ○ 減少
出題分野の変化	○ あり                      ● なし
出題形式の変化	○ あり                      ● なし
新傾向の問題	○ あり                      ● なし
<p>総評</p> <p>出題分野、出題形式に大きな変化が見られなかったものの、辺の長さや比の大小から図形の形を考えさせる、やや目新しい誘導問題が 2 問あった。難易度については、必答問題ではやや誘導に乗りづらい問題がある反面、選択問題は典型的で解きやすいため、全体として難易度に大きな変化は見られなかった。選択問題はどれを選択しても例年と比べ易しかったため、今年は必答問題をいかにしっかり得点するかによって差が付いたと思われる。</p>	

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	[1]数と式 [2]集合と論理 [3]2 次関数	30 点	[1]置き換えの誘導に乗れば単純な計算問題である。 [2]集合の要素をすべて書き出せば容易である。 [3]軸の位置で場合分けをする典型的な 2 次関数の問題である。
第 2 問	[1]図形と計量 [2]データの分析	30 点	[1]辺の長さの大小から図形の形を考えさせる誘導がやや目新しく、戸惑った受験生も多かったであろう。 [2](2)は Z が散布図における傾きを表していることに気づけば、散布図と箱ひげ図の関連付けができただろう。関連付けさえできれば、選択肢は容易に選べる。
第 3 問 選択	場合の数と確率	20 点	サイコロ 2 個なので、すべての場合を表で整理するとよい。昨年は事象を選択させる問題が出題されやや取り組みづらかったが、今年は確率を計算させる典型的な問題で解きやすかった。なお条件付き確率は 3 年連続で出題されている。
第 4 問 選択	整数の性質	20 点	(追試も含め)3 年連続で 1 次不定方程式が出題され、今年も典型的な問題であった。(3)は 144 の倍数を 7 で割った余りが 1 となる式が、(2)をそのまま使えることに気付けば容易に解ける。
第 5 問 選択	図形の性質	20 点	前半は角の二等分線と方べきの定理の典型的な問題である。辺の比の大小から図形の形を考えさせる誘導がやや目新しいものの、図形自体はそれほど複雑ではないため解きやすい。